

ビデオ 通信

2012年
9月20日(木)
No.3617

毎週月・木曜日発行
1ヶ月¥11,550(税込)
発行：飯澤剛
編集：齋藤浩一、齋藤知香

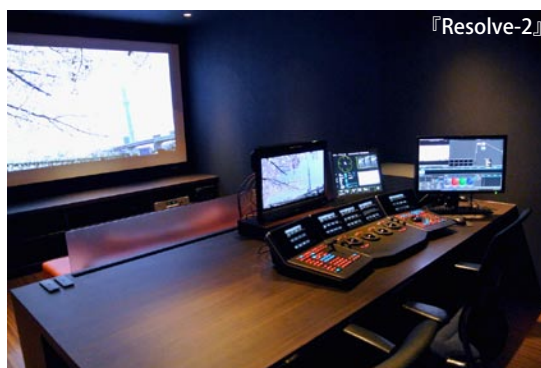
ユニ通信社

東京都千代田区神田司町 2-10
神田司町国土ビル 2F 〒101-0048
TEL：03-5256-1521
FAX：03-5256-1525
E-mail：vt@uni-press.net

IMAGICA デジタルプロダクション部

2室目の DaVinci Resolve 『Resolve-2』 を 9/20 オープン ノンリニアカラコレルームとしては 4 室目

(株) IMAGICA デジタルプロダクション部は
このほど、DaVinci Resolve を導入したノン
リニアカラコレルーム『Resolve-2』を新設
し、20日からサービスを開始した。DaVinci
Resolve 導入のノンリニアカラコレルームと
しては、3月に稼働を開始した『Resolve』
に次いで2室目、ノンリニアカラコレルーム
全体では『Film Master』、Baselight 導入
のデジタルカラーグレーディングルーム『北



齋』とあわせて計4室体制となる。『Resolve-2』は、Mac ベース/Windows ベースで計3式の
DaVinci Resolve が稼働し、ベースとなるシステムを変えることで、データセットや編集とも連
動して、多様なワークフローに柔軟な対応が可能となっている。また、120インチスクリーンを装備。
好評の『北齋』と同様に、大型スクリーンで確認しながらグレーディング作業も行える。同社では
『Resolve-2』新設によるノンリニアカラコレルームのラインアップ拡充で、デジタルシューティン
グの多様化、デジタルインターメディアイト (DI) を含むデジタルワークフローの多様化に柔軟
に対応していく。

ノンリニアカラコレルームのラインアップ拡充

『Resolve-2』のオープンについて、デジタルプロダクション部 デジタルイメージンググループ
課長の越智武彦氏は〈IMAGICA デジタルプロダクション部では、デジタルシネマカメラの多様化
やファイル収録の拡大を背景に、デジタルシューティングとワークフローを如何に効率化していく
かを目的として、“撮影グループ”、“テクニカルディレクター/テクニカルコーディネーター”、“デ
ータマネジメントグループ”といった各グループ/セクションが連携しながら、それぞれの体制を
強化してきました。DaVinci Resolve 増設によるノンリニアカラコレルームのラインアップ拡充は、
その一環として実施したものです〉とする。

『Resolve-2』の特徴の1つとして挙げられるのがスクリーニング環境。スクリーンで確認しな
がら作業が行える大型のグレーディングルーム『北齋』に次ぐ、ミドルレンジのグレーディングル

ームとしても位置づけている。

テクニカルディレクター／グレーダーの山下哲司氏は「スクリーンでグレーディング結果を確認できる北斎は稼働率も高く、同様の作業環境に対して高いニーズがありました。より規模が大きいプロジェクトにも対応する北斎に対して、立ち合い人数の負荷を軽減した Resolve-2 といった位置づけとなります。制作のスタートラインでは Resolve-2 を多用し、仕上げに近いタイミングで北斎を使用といった連携も可能です」とする。



Mac / Windows ベースで計 3 式の DaVinci Resolve を運用

DaVinci Resolve 導入のノンリニアカラコレルームは、今回の『Resolve-2』が 2 室目となる。DaVinci Resolve は、ファイル収録の拡大を背景として CM のほか様々なジャンルの作品のグレーディング作業に活用されている。

山下氏（写真→）は「撮影現場におけるデータインジェストシステム「ONSET DOCK」や、デイリーメディアの作成などでも DaVinci Resolve が活用されています。さらに、撮影現場でのプレビューからデイリーメディア、オフライン編集、合成といった各段階で、統一されたルックが必須であることが重要なファクターであり、その軸となるのが DaVinci Resolve だと思っています。多様なデジタルシネマカメラの登場と Log 収録の拡大で、カラーマネジメントはますます不可欠になってきています。「色」には、ある意味で正解がありません。しかしながら Log に対するアプローチの違いにこそ、ポストプロダクションとしての特徴が出るのだと考えています。カラーマネジメントや信号管理の中で、如何にクオリティを落とさずに狙いに沿ったルックを作っていくかだと思います」としている。



また、『Resolve-2』は、Mac ベース / Windows ベースで計 3 式の DaVinci Resolve が稼働する。同室の企画・設計を担当したテクニカルディレクター／グレーダーの石橋英治氏（←写真）は「作品の狙いや内容に応じて、ベースとなるシステムを変更することが可能です。Mac プラットフォームは GPU を強化してデータアセットを強化したほか、Windows プラットフォームも多くのスロットを有しており、レンダリングスピードも早くストレスのない作業環境を構築しています。複数台を有することでグレーディング作業とデータアセットの並行作業が可能のほか、Mac/Windows の両システムを持つことで収録データに応じた使い分け、編集作業との連携を考慮した使い分けなど、自由度の高い運用が可能となっています」としている。

デジタルプロダクション部、一連の強化策

IMAGICA デジタルプロダクション部は、デジタルシネマカメラの多様化やファイル収録の拡大に対応して、体制の強化を行ってきた。

“撮影グループ”においては、EPIC および F65 の稼働開始に伴うデジタルシネマカメラのライン

アップ拡充と VE/DIT による撮影現場の技術サポートによる作品や狙いに応じた撮影プランとワークフローの提案、データインジェストシステム「ONSET DOCK」を交えたポストプロダクションとの連携まで、一貫したデジタルプロダクション体制を構築。

また、“データマネジメントグループ”を新設し、煩雑になりがちなデータ管理をワンストップで行うことで、作品の狙いやカメラ特性によって異なる最適なデータ変換/ルック加工を提供し、スムーズなポストプロダクション作業へ繋げていく体制を強化した。

さらに、“テクニカルディレクター”および“テクニカルコーディネーター”の役割を明確化し、作品の狙いやコスト・スケジュールに応じて、フィルムの豊富な経験と、ポストプロダクションにおけるデジタル制作のノウハウから最適なワークフローを構築することで、スムーズな制作とポストプロダクション体制を提供。

Epic と
ONSET DOCK

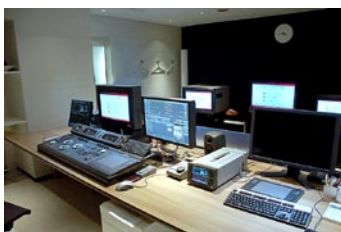
左から越智武彦氏、山下哲司氏、石橋英治氏、石田記理氏

デジタルプロダクション部 担当課長でテクニカルディレクターを務める石田記理氏は〈撮影グループ、データマネジメントグループの体制強化とともに、ワークフロー全体の設計図を構築するテクニカルディレクター、制作に寄り添うテクニカルコーディネーターが連携して、きめ細かいサポートが可能な体制が整いました。さらに、コンポジット作業の支援に特化した編集室「Satellite Dock」も開設し、CG制作/VFX 作業を含む多様なニーズにも対応しています。それぞれのノウハウを集約・明確化し、発展させることで、最適なデジタルワークフローの構築と、スムーズな制作・ポストプロダクション体制の提供が、これまで以上に可能となりました〉とする。

越智氏は〈ファイル収録の拡大を背景に、多種多様な出力方式と特性の異なった RAW データ/LOG データが混在しています。そのような状況のなか、最適なポストプロダクションフローを提供していくためには、“データマネジメント”と“ルックマネジメント”が非常に重要になってきます。体制の強化とともにノンリニアカラーグレーディングのラインアップ拡充で、制作全般をフォローアップしていきます〉としている。

◇(株) IMAGICA <http://www.imagica.com/>

「SCANITY」(写真→)によるフィルムスキャンニングとグレーディングルームが連携した DI 作業も強化している



左から『Resolve』『Film Master』『北斎』の各グレーディングルーム